

# 執筆 者 一 覧

(五十音順)

## 第 部 総説編

### 第 1 章

第 1 ~ 3 節 (『富山大学十五年史』より)

第 4 節 小谷仲男

### 第 2 章

第 1 ~ 2 節 小谷仲男

### 第 3 章

第 1 ~ 3 節 小谷仲男

### 第 4 章

第 1 節 深井甚三

第 2 節 瀧澤 弘

第 3 節 米田政明

第 4 ~ 5 節 庶務部

第 6 節 本田 弘

第 7 節 大井信一、塩澤和章

第 8 節 庶務部

第 9 節 庶務部、学生部

### 第 5 章

第 1 節 本田 弘

### 第 6 章

第 1 節 小谷仲男、駒城鎮一

第 2 節 庶務部

## 第 部 部局編

### 人文学部

#### 第 1 章

第 1 ~ 4 節 立川健治

#### 第 2 章

第 1 ~ 6 節 立川健治

#### 第 3 章

第 1 ~ 3 節 立川健治

#### 第 4 章

第 1 ~ 6 節 小谷仲男

第 7 節 小谷仲男、立川健治、湯川純幸

### 第 5 章

#### 第 1 節

海老原直邦、小谷仲男、小澤浩、鈴木敏昭、東田雅博、富田正弘、中河伸俊、本田 弘

#### 第 2 節

赤坂 賢、秋山進午、木下 良、竹内 潔、立川健治、筒井洋一、浜谷正人、吉田俊則、渡邊 洋

#### 第 3 節

小川洋通、中村雅之、藤本幸夫、二村文人、村井文夫、矢澤英一、山本孝一

### 教育学部

#### 第 1 章

##### 第 1 ~ 2 節

山本都久

##### 第 3 節

泉野佐一、長井真隆、中谷唯一

#### 第 2 章

##### 第 1 節

泉 敏郎、廣瀬禧七郎、山下三郎

##### 第 2 節

山下三郎

##### 第 3 節

中村義朗

##### 第 4 節

山下三郎

#### 第 3 章

##### 第 1 節

中井 学

##### 第 2 節

中井 学、林 三雄

##### 第 3 節

志波和子、中井 学

##### 第 4 節

小西照泰、長谷川総一郎

#### 第 4 章

##### 第 1 節

福田明夫

##### 第 2 節

西川友之

##### 第 3 節

大澤欽治、西川友之

#### 第 5 章

##### 第 1 節

野村 昇、山西潤一

##### 第 2 節

宇井啓高

##### 第 3 節

宇井啓高、河野信弘

#### 第 6 章

##### 第 1 節

塚野州一、観山雪陽

##### 第 2 ~ 3 節

塚野州一

##### 第 4 節

塚野州一、中川 眸

第7章	
第1～6節	山西潤一
第7節	佐々木光三、山西潤一
第8章	
第1節	瀬戸 健、水上義行
第2節	岸井勇雄、常川允子
第3節	大澤 保、陽 堅友
第4節	酒井義久
第9章	
第1～5節	山地啓司
経済学部	
第1章	
第1～6節	(『経済学部50年史』より)
第2章	
第1～4節	(『経済学部50年史』より)
第3章	
第1～6節	(『経済学部50年史』より)
第4章	
第1～2節	(『経済学部50年史』より)
第3節	吉原節夫
第4節	若林丈靖
第5節	大坂 洋
第5章	
第1節	(『経済学部50年史』より)
第2節	吉原節夫
第3～4節	(『経済学部50年史』より)
第5節	坂口正志
第6節	吉原節夫
第7節	田中祥子、米原俊孝
第6章	
第1節	長谷部宏一
第2節	増田信彦
第3節	森岡 裕
第4～5節	坂口正志
第6節	田中祥子、米原俊孝
第7～8節	坂口正志
理学部	
第1章	
第1～5節	(『富山大学十五年史』より)

第2章	
第1節	竹内豊三郎
第2～3節	理学部年史編纂委員(井上 弘、金坂 績、常川省三、広岡 公夫、増田恭次郎、水野 透)
第4節	竹内豊三郎
第5節	竹内豊三郎、高安 紀
第6～7節	理学部年史編纂委員
第3章	
第1節	竹内豊三郎
第2節	竹内豊三郎、山口晴司
第3～5節	理学部年史編纂委員
第6節	竹内豊三郎、石川義和
第7～8節	理学部年史編纂委員
第4章	
第1節	竹内豊三郎
第2節	中川正之
第3節	竹内豊三郎
第4～8節	理学部年史編纂委員
第9節	竹内豊三郎
第10節	平井美朗
第11～13節	理学部年史編纂委員
第5章	
第1節	松本賢一
第2節	水谷義彦
第3節	理学部年史編纂委員
第4節	風巻紀彦
第5～9節	理学部年史編纂委員
第10節	渡邊義之
第11節	理学部年史編纂委員
第12節	風巻紀彦、小松美英子、鈴木正昭、高木光司郎、田口 茂、対馬勝年、安田祐介
第13～14節	理学部年史編纂委員
工学部	
第1章	
第1～6節	能登谷久公
第2章	
第1～4節	吉川 和男
第3章	
第1～4節	加藤 勉、川崎博幸、丹保豊和、

	寺山清志、中嶋芳雄、中村優子、 能登谷久公、平澤良男	第4章 第1～2節	山崎佳夫
第4章			
第1～6節	中嶋芳雄、丹保豊和	附属図書館	
第7～8節	能登谷久公	第1章	
第5章		第1～3節	関場貞子、附属図書館
第1～7節	寺山清志、川崎博幸	第2章	
第6章		第1～3節	瀧澤 弘、附属図書館
第1～4節	能登谷久公	第3章	
第7章		第1～2節	附属図書館
第1～4節	加藤 勉	第4章	
		第1～6節	附属図書館
廃止された部局		第5章	
1 薬学部		第1～5節	平田 純、附属図書館
第1章			
第1～7節	山崎高應、吉井英一	保健管理センター	
第2章		第1章	
第1～3節	山崎高應、吉井英一	第1～2節	中村 剛
第3章		第2章	
第1～6節	山崎高應、吉井英一	第1～2節	中村 剛
第4章		第3章	
第1～6節	山崎高應、吉井英一	第1～2節	中村 剛
第5章	山崎高應、吉井英一	第4章	
2 和漢薬研究所		第1～3節	中村 剛
第1～3節	山崎高應、吉井英一	第5章	中村 剛
3 教養部			
第1章		水素同位体機能研究センター	
第1～3節	大谷重彦	第1章	渡辺国昭
第2章		第2章	
第1～4節	大谷重彦	第1～2節	波多野雄治
第3章		第3章	
第1～4節	大谷重彦	第1～2節	原 正憲
第4章		第4章	
第1～3節	大谷重彦	第1～2節	芦田 完
4 経営短期大学部		第5章	松山政夫
第1章			
第1～3節	山崎佳夫	地域共同研究センター	
第2章		第1章	池野 進
第1～3節	山崎佳夫	第2章	池野 進
第3章		第3章	池野 進
第1～3節	山崎佳夫		

総合情報処理センター

第1章

第1～11節 高井正三

第2章

第1～2節 高井正三

第3章

第1～4節 高井正三

第4章

第1～7節 高井正三

第5章

第1～5節 高井正三

生涯学習教育研究センター

第1章

第1～3節 米田政明

第2章

米田政明

第3章

米田政明

第4章

米田政明

第5章

米田政明

留学生センター

第1章

第1～3節 加藤扶久美

第2章

第1～2節 加藤扶久美

第3章

第1～2節 加藤扶久美

第4章

第1～4節 加藤扶久美

事務局・学生部

第1章

第1～4節 庶務部、経理部

第2章

第1～6節 学生部

なお、この他、写真、資料等の提供をいただいた同窓会、後援会等の団体、報道機関、旧教職員など、多くのご協力があったことに対して、心から感謝申し上げます。

富山大学年史編纂委員会委員長 小谷 仲男

## 編集後記

富山大学の創設は昭和24年（1949）5月31日であり、平成11年（1999）に開学50周年を迎えた。富山大学は大学50周年記念事業を種々計画するなかで、ほかの多くの新制大学もそうであったように、『富山大学五十年史』の発行を企画した。平成7（1995）年4月1日に富山大学年史編纂委員会を設置し、委員長に附属図書館長（当時、瀧澤 弘）をあて、事務局を附属図書館においた。編纂委員会はまず「富山大学年史編集・執筆要項」（31頁）を作成し、それに基づき各方面に執筆を依頼した。最終原稿の締め切りを平成10（1998）年12月とし、開学50周年記念式典（平成11年11月）にあわせて『富山大学五十年史』を完成させる予定を立てた。

編集作業は、第1部 総説編、第2部 部局編（各学部、附属図書館、各センターなど）、第3部 資料編の3部構成で行うが、とりわけ部局編は多岐にわたり、それぞれ事情を異にするので足並みは一様でなかった。そのうえ執筆者の多くは日常的に研究・教育の業務をかかえる現職教員であるので、予定通りには進行しなかった。平成10年2月から小谷仲男が附属図書館長・年史編纂委員長を引き継いだ。幾度か委員会を開催し、それぞれ担当の部局編の進行状況を報告し、お互いに督促しあったが、原稿締切日はおろか、開学50周年記念式典を過ぎても、全部の原稿が出揃うことはなかった。しかしその頃には教育学部、理学部、工学部、それに廃止された学部の経営短期学部、薬学部・和漢薬研究所などの原稿はほぼ完成しており、総説編、人文学部、経済学部の遅れが全体の足を引っ張る格好となった。結局、執筆者の変更、章節立てなどの変更をしながら、原稿の完成を急ぐより他にすべはなかった。早くに原稿を完成し、辛抱強くお待ちいただいた関係諸氏に、深くお詫びしたい。

当初の原稿締め切り予定から約3年を経過して、平成13（2001）年12月ようやく全部の原稿を集めることができた。それを大学本部の契約室にもちこみ、平成14（2002）年2月に契約がまとまった。校

正の過程でも手抜かりは許されないが、なんとか体裁の整った『富山大学五十年史』として世に出てほしいと思う。

編纂委員会から編集後記に書きとどめてほしいと依頼された事柄が二件ある。ひとつは年史編纂委員の教員二人の完成半ばにしての病没である。理学部助教授の近堂和郎氏（1999年4月、享年64歳）と教育学部教授の佐々木浩氏（2000年2月、享年59歳）である。二人ともそれぞれの所属部局の編纂に努力され、また委員会にも熱心に参加された。とくに佐々木教授は「教育学部」編を担当され、その手際良い編集に各委員は驚嘆させられた。当初の編集方針にそって期日までに原稿を完成され、それをしばらく教育学部先生方の自由閲覧にまで提供されたという。後で知ったことだが、ご自身が難病をかかえ、たえず死と直面されながらのお仕事であったと思うと、心が痛む。ここに謹んでお二人のご冥福をお祈りしたい。

二件目は年史編纂中、富山大学人文学部で生じた「入学者選抜試験合否判定過誤」の事件である。大学入試センターの受験教科・科目が平成9年度から大幅に変更され、それに対応して富山大学も受験科目、採点法を変更した。人文学部では受験科目の数学と の双方を受験している場合は、得点の高い方を合否判定に使用することに変更していた。しかし入試判定資料を打ち出す電算処理プログラムにそれを組み込むことはせず、それに気づかないままに人文学部は合否判定をした。そのプログラム・ミスに気づいたのは平成11年度の入試判定間際であり、すでに平成9年度に15人、10年度に1人を誤って不合格としていた。その年のプログラムは修正できたが、さかのぼって合否判定をやり直さず、その事実のごく限られた関係者の間で伏せられた。そしてさらに2年を経過し、平成13年2月にこの事実が明るみに出た。ちょうど任期満了に伴う学長選挙の時期と重なり、その対応は複雑な経過をたどった。人文学部は同年6月15日に教授会において平成9年、10

年度の16人の新たな合格者を認定し、大学はそれを公表し、正式に謝罪の意を表した。

この事件は当時誤って不合格とされた16人の受験生をはじめ、多くの関係者に多大の迷惑をかけ、富山大学の信頼をゆるがす大きな不祥事件であった。編集委員会では出版の遅れている段階で、今回の『富山大学五十年史』に書きいれるべきではないかという意見が出た。『五十年史』の取り扱う範囲は、すでに委員会で記念式典の記事を除いて50周年記念日（平成11年5月31日）までと取り決めてあった。今回の事件の発覚はそれ以後のことであり、また現在も国家賠償、大学側のお詫びなど、その後の対応が進行中であるので、むしろ今は関係資料の収集、保存に心がけるべきで、詳細な歴史記録は次回にゆだねるという意見が大半を占めた。ただ「編集後記」にふれて欲しいということであったので、ここに事件の概略を記した。

最後に若干の弁解と謝辞を記して編集後記を閉じたい。編集委員会の仕事として『富山大学五十年史』として必要最低限のことを書き漏らさず、重複部分があればそれを削るというのが大きな役割であると自覚するが、長い期間の多岐にわたる事柄を、しかも多くの執筆者それぞれの個性で書き上げられた原稿を前にすると、調整することの自信を喪失する。

あらためて50年の歴史の大きさ、重さを感じる。それにもかかわらず編集委員諸氏はそれぞれ担当部局の原稿取りまとめに努力され、責任を果たされた。また編集委員に協力され、それぞれの個所の執筆を担当された学内の教職員諸氏、また大学を離れ、不便な中で執筆された名誉教授をはじめとする先輩の諸氏に深く感謝申し上げたい。総説編を読まれてもお分かりと思うが、資料としてこれまで富山大学が刊行してきた「富山大学学報」、「学園ニュース」などを十分に活用させていただいた。それらには無署名の記事が多かったが、いずれもすばらしい記録であった。また連綿と記録されてきた「評議会議事録」、「学部教授会議事録」を参照することなしに『五十年史』をまとめることはできなかった。それらの記録に当てられた先輩事務職員諸氏にも感謝の気持ちを表したい。最後になったが、本書題字は押田雅次教授（教育学部）の揮毫になる。あわせてお礼申し上げます。やがて大学再編統合などで富山大学も変貌すると思われるが、そのような時期を前にこの『富山大学五十年史』がその歴史を伝える役目を果たすことを期待して筆を置く。

富山大学年史編纂委員会委員長 小谷 仲男

---

富山大学五十年史 下巻

---

平成14年10月発行

編 集 **富山大学年史編纂委員会**

発 行 **富山大学**  
富山市五福3190

制作・印刷 **株式会社チューエツ**  
富山市上本町3 - 16

---